

講演会

「和紙と環境」講演会 森島 紘氏

T.D.A交流委員会主催の講演会「和紙と環境」について森島紘氏を招いて東京南青山のスパイラルビル6Fスパイラルルームで平成7年11月10日(金)行われました。参加者はT.D.Aの関東地区の会員30名強。開始前に交流委員メンバーがワインと簡単なおつまみも用意し、パーティーのような気軽な雰囲気の中で氏の作品のスライドを見ながら、和紙の歴史については大変詳しく説明して頂きました。又、氏の和紙との出会いやこだわりについて、自然と一体化して生きて行くことの大切さなど心に残る話でした。森島氏は昨年名古屋で行われた国際インテリアデザイン会議のイベントで銀賞を受賞しています。

講演内容要旨

●自己紹介及び紙についてのエピソード

業界で多少異なるが結婚の節目を祝う時25年で銀婚式、50年で金婚式は一般に良く知られていることですが1年目は「紙婚式」というのがある。「人情紙のごとし」と言って薄くすぐ破れるとの意味か。紙はその程度の価値のもの。氏は当初グラフィックデザインを手掛けていた時、グラフィックは紙に表現することから段々紙に興味を持つようになり、手で作る手すきの紙の世界に入った。当時は競争相手もいなく、評価され名も出るようになったが最近では沢山の有能な人がいっぱい出てきた。

●紙の歴史

ペーパー(paper)はパピエル、エジプトのパピルス(水草)から作られた、昔エジプトは緑豊かな国でパピルスが豊富にあった。パピルスの茎を開いて植物の粘液でくっつけて紙にした。それ迄は石に書いていた。エジプトは商業の中継点として盛え商売の契約書を作る為軽く持ち運べるものとしてエジプトの隣にベルガモンという国があり、エジプトに負けないような文化を持っていた。この国でパピルスに代わる羊皮紙が作られ200年前まで欧米では作られていた。アメリカの独立憲章が書かれているのもこの羊皮紙。紙の必要性は宗教の布教のための聖書の影響が大きい。アジアではBC100年頃中国で現代に通じる紙が発明された。植物をたたいて繊維を晒らして網で掬うものであった。又、ボロ布をたたいて水に散らして掬い作るものもあった。日本へは700年前遣唐使が遣隋使の時代つまり聖徳太子の時代に仏教と一緒に入ってきました。ヨーロッパに伝わったのは日本より500年後の1200年後のことです。仏教が紙の必要性を広げてきました。仏教は三つの大事なこと「坊さんを大事に敬うこと」「寺、仏像を作ると救われる」「写経をすること」でした。又、仏教の教典は膨大な量のもので一冊の本には収まらず写経するには紙が沢山必要になったわけです。紙の素材は中国は竹、日本は木、インド東南アジアはシュロの葉など地域の特性を顕わしています。中国から日本へ和紙が渡って奈良から京都の平安文化へと移り、貴族の中でも女性が源絵巻などや恋文などを描くようになり、色のついた紙や金粉をあしらうなど、きらびやかな紙がつけられました。時代は下り秀吉の時代に千利久により素材を和紙、植物の繊維の残っている紙を作りました。さらにその後江戸時代になり紙がインテリアに使われるようになった。奈良時代には家屋は窓と言っても板でした。引き戸も日本の発明ですが当初は重い板でした。これが両面紙にした襖間、片面で障子になりました。又、燈りも当初はローソクのみから明燈に発達したり江戸時代の三勤交代には竹製の籠に紙を貼り漆を塗り柿渋で防水したトランクや道中ガッパやスゲ傘も作られました。

●植物繊維をたたいて水に散らし掬いて作るという和紙が日本に



入ってきて利久の時代に改良された。繊維は重く水の下に沈んでしまいます。これを沈まないために「ネリ」を入れゆるすることで繊維が絡む今の方法が開発された。ネバリその材料は「ノリウツギ」「トロアオイ」など。それまでは繊維を重ねるだけ。ネリとゆるすることで軽く暖かい乱反射する紙ができるわけです。ヨーロッパには中国で開発され1200年後に伝わったがネリのない方法でこのタイプはエッチングやリトグラフには向いている。ヨーロッパでは1800年頃ドイツ人のケラーという人が洋紙の作り方を発明。大きな大木をチップにして機械で作る。地球が丸ボウズになるのはこの時から始まりました。植物は地球の肺、ここ15年で緑が50%になった。環境サミットもできたが進んでいない。日本もパルプ原料は全て輸入。リサイクルは日本は55%アメリカ45%。森の2~300年経った木をダイコン降しで粉にしてしまう。最近は何草を原料に使っている。7~8年前アメリカで何が適するか3,000種の植物でテストされた。木より50%コスト高となる。日本では中国から渡ってきた時は麻や竹、その後、たんぼの防風林として使っていたコウゾの枝だけを切って使っていた。しかし枝を切って繊維を取り出すのに手間と時間がかかる。紙を作る工程の中で漉くのは10%原料を作る手間が90%かかり効率は悪い。リサイクルは平安時代から行われてきた。日本は農耕民族、根こそぎ食べず絶えないように残しておく心と呼び戻したい。江戸時代は紙が絹や金や米と同じお金代りになった。明治時代より半紙が贈答品に使われた。大正時代はドイツから機械が入り和紙も機械化された。現在日本全国で手漉きの和紙を使っているのは200軒、原料も手に入らず後継者もなり手がない。21世紀には30軒となる。今後は草の紙になるだろう。

●森島氏は真底から身も心も紙のとりこになっている。頭で考えて手で作るには時間がかかる。このことが良い。人間の手を超える物作りは僕にはダメ。紙は手で作れ、ある程度数も作れる。紙は破れる、曲がる、キズも出る、自然と一体化して生きてゆく相応が良い。

●クラフトマンやデザイナーそれぞれ、こだわりや専門性を持っている。単に感覚的に物を作るだけでなく、和紙についての歴史も面白く話して戴きました。又、地球環境保護に対する思いも深く、こうした情熱と奥行きに共感し、参考になると思い氏の説明して戴いた歴史も記録しました。もし間違えているところがあればお許し戴けますように。

レポート[杉山哲三]